

奈良文化女子短期大学 幼小接続ワーキンググループ合同研究会
第47回 議事録

1日 時 平成25年5月18日(土) 11:00~12:50
2場 所 奈良文化女子短期大学 本館 5階(第1演習室)
3参加者 18名

うち新規参加者 6名

吉岡美保 京都府丹後教育局
榎本ゆかり 京都府中丹教育局
杉本里佳 京都府乙訓教育局
中野智哉 安堵町教育委員会
松田博美 安堵小学校
岡田香織 柏原市教育委員会

学生参加者 1名

本学事務局 4名

4 内容

(1)はじめに

新規参加者の自己紹介および本日参加者の自己紹介もあわせて行われた。

(2)「言葉の力を育てる幼小接続のあり方」について善野代表よりミニ講演

○文科省(2011年)3つの自立「学習の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」 学習においては、人の話をよく聞き、適切な方法で表現できる力を育てることが基本。生活上の習慣やスキルを身につけることも大事だが、できない時に「助けてほしい」と伝えられるかどうか、ことばの力である。それには自分の良さや可能性に気づき、意欲や自信を持てる精神面がベースになる。

○幼児教育では、子どもと保育者は近い距離で、保育者が子どものことばを1対1で聞きとるが、小学校教育ではクラス集団のなかで挙手、返事をし、大きな声で発言するよう指導される。この変化がとまどいになり、発言をしなくなる子どもがいると思われるが、適切な指導をすることで、伝える喜びを学ばせることができる。

○二文字ことば(子ども:「やだ むり うざ」教師:「つぎ だめ やれ」)では、ことばの力は育たない。教師が子どもに伝わることばをいかに意識するかで、子どもの側の理解力や表現力も変わってくる。

○豊かな言語環境とは、指示から支持へ、キャッチボールからバレーボールのコミュニケーションが大事。例えば、園児が遊びの中で「1回にころがすどんぐりは6個です」と言ってきた時、「どうして6個?」「10個じゃだめなの?」などと問いかけることで、園児による言語化が起こり、それが体験として根づく。「すごいね!」だけでは豊かな言語環境とはいえない。子どもが何か失敗した時も、指示で終わるのではなく、どうすればよかったか?等と子ども自身に問いかけることで、考えさせる方向性をもつことが言語環境である。また、教師と子どものやりとりから、他の子どもに投げかけることで、子ども同士の対話

を生む（バレーボール型のコミュニケーション）。

○たとえ多くの体験活動をさせても、どのような言語環境だったかを問わなければ意味がない。子どもの気づきや発見をことばで受けとめる環境があって、はじめて意義がある。

○ことばの力を育む具体的な教育方法として、1分間スピーチ／ショウ・アンド・テル／成長ものがたり発表会 などの紹介。ある5才児クラスで話し合い活動をさせたところ、その後の活動に良い変化が生まれた。

(3) ワークショップと各グループからの報告（校種混合による3グループで協議）

○参加メンバーが3グループに分かれ、「とまどいマトリクス」を用いて、小学校入学後子どもたちの、ことばに関するとまどいの実態を出し合い、協議をすすめていった。

○各グループからの報告

[第1グループ] 報告者 中野先生

- ・小学校関係者からは多くの事例が出たが、幼児教育関係からは少ないのが特徴だった。
- ・子どもの話を聞く時、保育者は「です・ます」の制限はしないが、小学校では「です・ます」調で話すよう指導するため、子どもが話しづらくなっている実態があるのではないかと意見が出たが、生活場面では子どもの気持ちを汲みながら話を聞いており、授業はあくまで公共の場として、適切なことばづかいを指導している。

[第2グループ] 報告者 南先生

- ・第一グループ同様、言葉の力に関係する戸惑いの記入は難しかった。
- ・入学後すぐは、全体の場ではうまく話せない子どもや、全体への指示が自分も含まれると理解できない子どもがいる。
- ・子ども同士の遊びのなかで、ルールが共有できない場合がある。
- ・「(下の名) ちゃん」から「(名字) さん」などに呼び方が変化することも、子どもにとっては戸惑いになるのではないかと。参加メンバーの勤務する小学校では、全員を「(下の名) さん」と呼ぶことで統一しているが、中学との接続のとまどいがある。

[第3グループ] 報告者 吉岡先生

- ・入学後の指示のむつかしさのエピソードとして、小学校で休み時間が終わり、子どもたちが教室に戻ろうとしていた時に、教師が「早く戻りなさい！」というと、きびすを返して元いた場所に戻ろうとしたことが紹介された。
- ・小学校では「です・ますで、話しなさい」と指示が入ることにより、話しづらくなる子どもがいる。
- ・ある幼稚園では、体験入学の後に、子どもたち自身が小学校に向けて態度やことばづかいを変え始めた。それが小学校に伝わり、入学後の様子も幼稚園に伝えられ、よかった。効果と効果をうまくつないでくれる担当者（教頭など）がいると有効ではないか。

(4) 善野代表によるグループ報告へのコメントとまとめ

○幼児教育からは、「小学校入学後に子どもが何に困っているかよくわからない。」とよく言われる。しかし、幼児教育でつけた力が使えているのか、つながっているのかを知るとは、前提である。入学後の実態を知る機会を設定したり、今年度の卒園時の課題を質問形式でメールで問うたりするなどのシステムは、幼児教育での5才児の教育に生かすことでもある。幼小接続を積極的に行っていることが、保護者との信頼構築ともなり、園にとっては経営のアピールにもなる。

○子どもの呼び方は、どの呼び方が良いかよくないかの答えは出ていない。学校ごとに説明できる根拠があれば、どの形でも問題はないのではないか。

ただ、ある小学校では障がいをもつ子どもだけに「ちゃん」づけで呼んでいた。社会性を育む観点からも、他の子どもたちと同様の配慮で統一すべきである。

○命を守るための指示が指導者に的確にできること、子どもに伝わることは必要であり、子どもの側に聞く力、自分の命を守れる態度をいかに身につけさせるかは、何よりも重要である。

(5) 参加学生の感想

実習では、生活発表会の直前で、発表会に向けて毎日、劇遊びをされていました。せりふや道具も先生や子どもたちが手作りし、より良くなるように話し合いを何度も繰り返されていました。

「～はダメ」とか、「～しなさい」と先生指導されるのではなく、「～になってたけど、これでいいかなあ？」とか、「どうしたら、もっと、～になると思う？」といった問いかけをされて、子どもたちに考えさせて、意見を引き出されていました。

子どもたちは活発に発言し、友だちや先生の意見も受け入れ、どんどん劇が良くなっていきました。先生は認めることもしっかりされていて、一週間の実習でしたが、子どもたちはどんどん、自信をつけていき、素晴らしい発表会でした。全員が自ら発言できる訳ではないのですが、5歳で、話し合いができることに感心しました。

今日の研修会で学んだことが2つあります。

1つめは、小学校入学当初、2つ以上の支持が通りにくい。解決策として、入学当初は「これした人は、これして待っててね。」と伝える。

2つめは、敬語を使えない。解決策として、「ooooです。」「ooが好きです。」と先生がまず見本を示す。発達段階に応じて、適した時期から「です。ます。」を使う。

なかなか気づかない、子どもの実情を知ることができ、また、解決策も教えていただき、子どもを理解することにとっても役立つと思いました。幼小、両方の立場からのご意見は本当に貴重です。ありがとうございました。

5 次回の予定

平成 25 年 6 月 15 日（土） 11:00～12:30